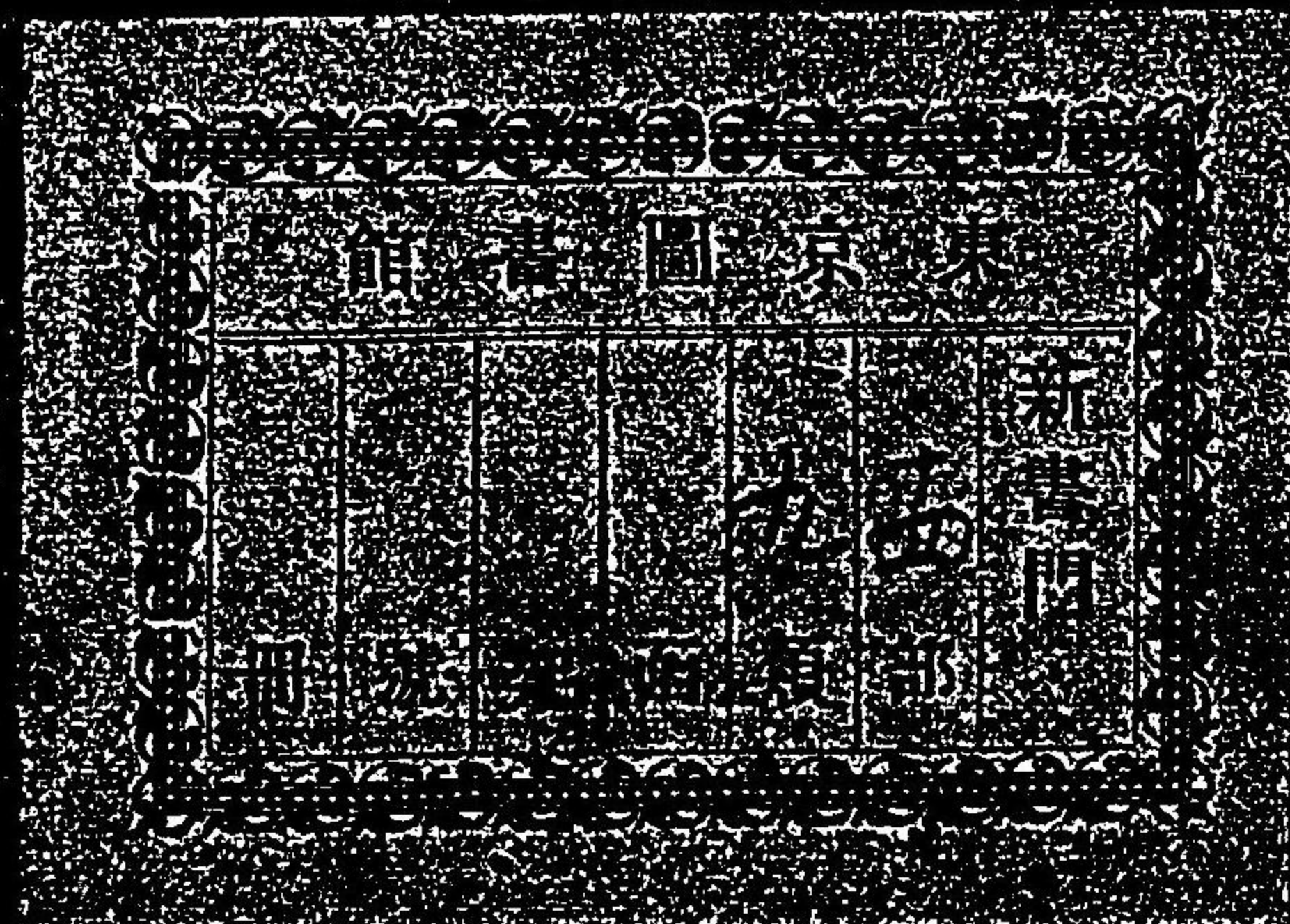


特56

338

垂水良運錄
明治往來傳四篇

完



明治十七年十月新刻

明治往生傳四篇完

日新堂梓

明治往生傳四篇

目次

一三州碧海郡西境村長善寺準教上人 初帙右

一陸奥東津輕郡平館村福昌庵信導法師 六帙左

一京都六軒町安樂寺 智月法尼 八帙左

一同油小路下長者町誠香禪定門 十二帙右

一尾州知多郡平嶋邨 戒涼法尼 十四帙右

一相州淘綾郡大磯驛 妙揚大姊 十五帙左

一同州三浦郡橫須賀町芳光居士 十八帙右

一尾州知多郡藪邨 了女 二十帙右

一同州同郡名和邨

紫雲大姉

二十一帙右

一三州荒井山九品院同宿祐心大德

二十四帙左

一同州加茂郡三好村 智天信女

二十六帙右

以上十一人

明治往生傳四篇

沙門 垂水良運 錄

準教上人

聖空準教上人靈賢和尚也。三河國碧海郡西境村長善寺
 住職也。尾州名護屋飯田町小林由之助乃息也。十
 歳より出家。長善寺準覺上人と拜して剃染せり。ま
 より年経て尾州愛知郡部田村祐福寺に宗戒兩脈を
 継承せり。遂に師蹟を補ふ。長善寺住職乃命と蒙り
 れぬ。平常の毎二乃念佛者也。又くざりしが。明治十一年
 其頃より厭欣乃心發起して漸く厚く。由は願生

念堅固なり。自行化他。専稱念佛。その後。されど尾
三兩國有縁。乃道俗。一平。隨ひ。吉。其。流。を。汲。く。一
向。念。佛。する。人。多。かり。り。至。然。る。不。厭。欣。の。心。年。々。に。増
進。去。く。稱。名。念。佛。を。する。事。の。あ。く。急。勵。不。行。任。坐。臥。す
る。事。な。り。實。上。根。上。行。乃。言。僧。あり。と。法。村。の。人。と。隨
喜。讚。歎。を。さ。ざる。い。な。り。一。か。く。て。明。治。十。四。年。二。月。十。四
日。夜。弟子。小。僧。目。覚。て。あり。り。る。小。師。の。寢。所。より。名。香
。志。句。ひ。薰。下。來。り。り。る。と。奇。と。思。ひ。く。師。乃。寢。所。より。至。り。又
。不。燒。香。と。種。々。に。遺。書。あり。寺。内。の。人。と。大。小。警。覺。皆。と
。寺。内。と。る。る。不。居。終。る。べ。彼。是。を。る。う。ち。曉。て。よ。かり。り。れ

だ。瑞。表。乃。人。と。と。報。を。變。を。尋。る。不。近。た。池。乃。傍。下。駈
。双。足。ぬ。だ。ま。ま。と。り。る。と。思。く。み。あ。く。警。覺。速。く。池。中。不
。舟。を。浮。ぶ。く。竹。と。り。て。探。り。見。る。小。上。人。乃。遺。身。外。あ。か
。り。水。上。に。浮。び。ぬ。其。身。を。ち。舟。不。棄。を。死。相。を。見。る。不
。墨。深。の。衣。木。蘭。色。乃。法。衣。と。若。し。合。掌。此。左。の。手に。念。珠
。を。掛。面。容。生。る。が。如。し。と。う。る。い。く。苦。痛。を。た。り
。命。終。乃。さ。は。り。り。至。見。夢。の。人。と。奇。異。の。思。を。か。次。聖。十
。日。檢。屍。の。方。に。池。の。石。より。不。修。を。死。骸。を。見。終。ひ。な
。と。く。此。身。死。と。い。大。小。異。也。と。い。ま。れ。と。ぞ。相。夫。より。遺
。骸。を。長。谷。寺。に。移。し。有。縁。乃。道。俗。集。ひ。て。葬。式。乃。用。と。辨。し。

十七日。遺身を入棺して本堂に置りる。法村より集詣の道侶群とす。死相を拜し、落涙し。上品往生の言傳ありと。随葬後款を乞ふものいなきあり。實不明治十四年二月十四日夜。世齡三十一歳なり。諸上人往生の時。ふあうりて。奇瑞を感えざるもの少く。びとひへども。畧し其一二とあぐ。

同村政助。其夜目覚る。見れば。此透間大あり。一夜のりと思ひて。戶外に出で。見る。光明一天。又満り。いりする事かと。奇異乃思をたし。夜明けのほご。程も有なんと。聞入る。外也。○同村あると。いふ一婦人あり。平

生後世の志もなかり。今年一月。此頃より願生。西方此志發起して。長善寺和尚様。極樂往生の要道。我聽。さんと思ひ。ぐあり。は。つ。ふ。同夜。後。う。く。長善寺。ふ。至。り。く。上。人。又。見。な。る。ふ。上。人。曰。我。此。度。の。西。方。に。修。上。の。往。生。す。べ。し。其。方。と。跡。より。往。生。す。べ。し。西。方。に。淨。刹。に。往。生。遂。る。に。も。別。乃。子。細。なり。南。無。阿。彌。陀。佛。と。と。中。げ。り。ふ。て。阿。彌。陀。佛。に。助。け。給。ふ。なり。一。期。念。佛。怠。る。こと。な。ら。ぬ。と。勸。免。給。ふ。か。と。思。ひ。て。さ。え。と。り。○西。境。隣。村。井。ヶ。谷。太。兵。衛。乃。素。同。夜。戸。外。に。便。更。り。出。で。見。る。多。小。彼。乃。他。乃。上。と。た。が。し。き。更。ふ。西。方。に。空。中。より。光。明。乃。耀。く。を。見。な。る。其。光。

明乃中名東境村乃氏神乃森乃樹木を照く也。いのかる
祥瑞可と。目をほく瞻仰き。○同夜同村乃亮金尼夢之
らく。長善寺上人墨條の衣木蘭色乃袈裟を着し。門口
より入給ひて。亮延厄に在庵かと尋給ふ。善く亮延へ
海山中師乃庵は諸く。今教を私一人なり。貴上人は何
へおこしやと。やとりよ上人我の今より極樂を往
生を遂るなりと。善く門口と出給ふと思へば。善く
とぞ。○同夜同村なる茂平善くらく一僧西才より来り
て。目前より立給へり。いと暗く。一僧は分り難く。忽ち
光明かやれり。れど。長善寺上人ありと。実よ善く思ひ

く面容を拜して。有りるう。ありや。○尾州志知郡
傍寺本村。西境より行たき女と。いふ信者あり。同夜善
らく。長善寺上人来り。給ひて曰。我今西方に往生せべし。
そ方と。跡より来るべし。と。たき女曰。行くは同道より
と。上人曰。同道にかきひ難く。かき。次跡より来るべし
と。告給へると。思へば。さ免ぬ。○上人乃弟子。小准旭とい
へる小僧あり。名古巻長徳町の百屋師の命。終は少病あり。曰
。家へ返る。善く生きたる。小。速よ全快あり。同月下旬ある日。小
僧念珠を揉み。称名してあり。り。師墨條衣。木蘭色
乃袈裟を着し。来現して。告て曰。汝多日俗業あり。事な

浄刹じやうせつありて。快樂くわくらく不退ふたい乃身みとなりたりと。又告またつく曰いは汝なんぢ速はやく俗塵ぞくじんを生はず。別染べつぜんの身みやなるべしと。若もし志しゆるるをいと苦くるたると思おもふうち。聖せい衆しゆをかく見みくむなり。母はは乃目めりい。実じつに難あつむ事ことなりと。落らく涙なみだして母ははを呼よび。母はは乃目めりい。見みる事ことなりとぞ。

上かみり奉たがひ多おほく。光明くわうめい夢見ゆめみ乃人ひとと。聖せい十五日じふごにち朝あさ上かみ人ひと入い水みづ往生じやうじやう乃巷くわう説せつをゆとひとしく。あそれ前ぜん夜や乃なは。入い水みづ往生じやうじやう乃来ら迎むかひの奇き瑞ずいなり。乃なは。奈な得とくして。各おの各おの悲ひ慶けい敬けい教きやうして。彌み陀だ本ほん願ねんの虚むかきさるるを信しんじて。往じやう生じやうの信しん行ぎやうを警けい策さくし。念ねん佛ぶつ精じやう励れいに成な者ものいと多おほうりとなりむ。亮りやう光くわう上じやう人じんの如ごとく。古こ

き上人じやうじん往生じやうじやう此こ奇特きせきを載のるものなり。餘よ人じんさうに好このま行ぎやうぎよやうはあはれ。勅ちやく修しゆ傳でん曰いは末ま代だい當たう五ご乃な行ぎやう者ものの。機き根こんよりき故ゆゑに。考かうふ思しふ者ものありとも。考かうふ思しふ者ものありとも。後こう悔かいの一念いつねんもあひぬべし。実じつに尚なほ機き根こんよりき者ものの。自じ害がい往じやう生じやう入い水みづ往生じやうじやう。斷だん食じやく往じやう生じやう等とう事じ。末ま代だいの料りやう砂さをべし。只ただ吉きちの大師だいしの教きやうを深ふかく信しんじて。一いつ向きやう修しゆ乃な稱せう名めい念ねんに相さう續じやくして。畢ひつ命めい為な期き乃な行ぎやうを勸つとむべきものなり。右みぎ尾び州しゅう嶋じま海かい山さん中ちゆう亮りやう光くわう上じやう人じん乃な抄せう録ろく。殖しやく字じ公こう布ふをり。れうる一いつ小せう冊さくを得える。全ぜん文もんを爰こゝに編へん入にゅうす。末ま代だいの遺い才さいを。示しす。遺い代だい乃な不ふ朽きやうなり。免めん人じんと欲ちやくされむなり。

信導法師

俗名長誠信導法師。陸奥國東津輕郡平館村福昌庵乃
任職なり。本國東京牛込の寺より還来。其の嫡男なり。性
けい直志操剛毅。素の商賣なり。を。仕歳乃頃或
諸候に仕く。武士となり。亦還く商となり。好きて賣
諸者となり。遊藝に耽る。漫遊を究む。三十三歳乃去。双
親の死去に値く。頻く憂鬱轉変の景状を感ず。立地り家
を變て。剃髮深衣。水乃身と成く。徳國乃靈場靈刹を
巡拜する。年ハケ年。六十餘州至。所なる宿縁を
あり。あり。や。陸奥外ヶ濱平館村福昌庵に來り。一泊乃

變り。於此空庵なり。り。留ま。居乃同行より。強く抑留
せしめ。其後此變り任庵より。自爾以來十有七年。心行策
進して。一日に。一日に。此稱名深業四萬種より。妙
法。於堂宇修繕。力哉盡す。回りと。鼓舞を。百般多此の
中。とり。日深。更。〇明治八年四月。
本寺蟹田尊念寺三浦義山晋山あり。浄土宗附弟
となり。安心起行乃秘訣を傳義。一層道信を信増を
し。近隣回行の中。武百餘員乃日深講を信社。
連月衆と。不別時會を。春秋兩度乃彼岸。い。
本寺三浦檀少。正山を聘請。俱。法味を嘗。日深を

加増せらるゝと會則とせり。○同十二年五月。謙倉本山吉水
中教正。巡化の際。法駕と屈清しく。教化を聴交せり。夫
よりりりく奮勉金剛心を發し。日々裸稱幾葉とり不敷
なく。不退不勒修せり。○同年十月頃風病あり五三日。病
牀に閉籠り。西道と急ぐゆゑ。水穀と断り。香灰不臥
不称名。一公待死乃思ひ切せり。同月終歎しく種く制
止しり。一月乃仰慕然止む。本よりさるどの病
氣ありとあり。福む。一室を出て平日に如く勒行し。或は對
活せり。十二月三日頃感見乃松子あり。此度の諸人乃棟
をとも用ひむ。再び絶食し。孫く西陣と決定して。衆下永決

し。まより一室に入り。日課乃親友三名乃外出入を禁
じ。没後乃行李百般を寂上辰兵衛米谷傳八両氏に託せ
る。病床より長く葬送乃具等命終七日。前金備志く念佛知
る。乃者持系せり。大に教び厚く礼謝せり。○十二月
十八日。本寺三浦教正。其身病中ながく。風雪と侵して。來
臨あり。念佛に功德修終の用に列祀乃偉訓と示し。金
基乃再會と約し。十念と授與せり。以。歡喜面目不溢
き。前後五度まで相交し。偕海去せり。寺外まで送
り出く別をせり。ぬ。○十九日より。佛前内陣へ詣て。勒行
を修し。前日本寺教正の教誨乃説を衆ふ示し。念佛禮拜

まゝの事。二十二日正午に五きり。同日午後六時、一室の
爐邊に。端坐念佛を。看侍乃者、次乃間、夕飯を喫せ
る。微音念佛乃、初、未だ往生を思
ざりし。端坐合掌、念佛乃、息絶り。衆
の哀情考妣と失ふ。遺言、堂前、塔の傍に埋葬せり。其、不明治十二年十二月廿二日。行年
五十七歳なり。

智月法尼

法尼智月、京都後小路、鉄匠町、角坂、松平兵衛の娘なり。

同所六軒町一条下、安樂寺に住せり。賦性謹慎篤実、小
も、慈悲の心深く、容貌ま、世間無比の美人なり。然れ
ども、幼時より佛書を拜見するを好みて、縹色を喜ぶ
べ。恭敬三寶乃志厚く、出塵乃身となし、人事を希求
せども、碍多事乃とありて、素意を果さば、年月空しく
素外、暮行、の、後、西浄室乃、真人煙り
、山寺に入る。ある老尼と、別時念佛、心
行策勵せり。○二十一歳、法、同所寺町大雲院の門上
人を師として、剃髮乃素意を遂げ、道心堅固、
、稱名乃時、毎、打志免、後、風情

おろ。業障消滅南無阿弥陀佛とこと唱へらるるさま。道
情面ありあつたれ。いと濃なり其行状乃誠実なる。一二
といふ。任持智玄尼を孝養尊敬あり。慈親り事々如
く。滅後りの追慕供養乃至滅なる生亦小對する。佛
前乃進退りの恭敬修を肯としく大賓に向ふが如く。四
威儀了淨觸等乃嚴肅ある。天性不出るふ似り。至義每
益乃語をききん。雜穢戲笑乃話ある事なり。又他り勞と
熟るるを厭ひく。我が勞と加へりらば。伊小淡薄を甘ん
どく滋味を嗜まば。物と畜畜也。直言よしと佞曲なり。比
徳とくまじり状有徳乃男性と及び難き福あり。又言貌極
コトハカキ

と温和謙遜より。膝下は侍せらるるもの。肅ととして欽と
教ふ。法尼毎も畜畜を見らるる時。梵網經乃如是畜生
衆善觀心とある文を誦し。願念念佛せらる。その風情いと
殊勝なり。かゝりれば。本山より河原町三本木圓通寺
へ。任職を命ぜらば。されたる京都無教乃大地ある尼寺を
れた。寺務繁多よし。自行の妨となりん事を恐まぐ。固
辭して命を乞は。其名利り疎き念意知る。○明治
十五年三月下旬。病病罹り。醫藥更り効あり。五月
中旬死に。重病とありり。蓮友北野轉輪寺一定
和尚同族と。尾州寛光上人より得られ。拾遺專念

往生傳を持し種々善活せしき。以後ハ必死乃覺悟す。
一向ヲ專稱名お侍し。往生を期せしきと。いされり。
ハ法危頻リ悦びく。欣求乃心平生ニ倍し。一心待死病者
を凌ぐ稱佛間断あり。殊リ重病乃中毎朝盥漱ぎ。暫時勤
行あく辱しはき。此の免も角も助給く南無阿彌陀佛
と。とりひくお侍也。法眷知音ハ資具を分与し。永決を
告げ。浄土乃再會を約し。臨終乃行儀を整へ。悲喜あもぐ
ハ佛力と仰ぎたる。さ侍者侍とらた。小決を潤しり。是
より室中解言す。唯一向ヲ稱名乃聲のとなり。看侍二
三人づ。枕邊に坐し。香と焼く助音念佛也。○六月五日

病者東枕ニ寤くあり。俄然直ち西に向ひ合掌し
く。歎喜乃涙を流し。只今雲雲多たびきく。弥陀如来歎喜
勢至乃三言降臨在しあり。難有し。といふ。又少時
花紛こと降。音樂妙ハ異香薫。法佛菩薩摩訶影嚮
ハ臨り。と語る。看侍者の曰。我等一人も拜せざるハ。煩
悩乃業雲ハ覆もれ。近づき。迎接乃圓より美し。たや
吾や。法危普く曰。其圓乃如たりの比せ。べく。次殊勝
ある事。誓をせざる。小物なり。と。その解種。乃好相を感。又を
り。と。あ。凡そ數十。なと。又くあり。是ハ往生の瑞相な
りと。歎び乃顔色平生乃如く。いと鮮あり。斯く極樂へ首

途乃公^{トウノキミ}や。除髮^{トクハツ}きんとし^{カヤスル}る。看侍^{カンシ}ありか^カむを疎む
き^キも肯^{ケン}ま^マら^ラ。強^{ツヨク}く頼^{タノ}ま^マる^ル。故^{ユヘ}除髮^{トクハツ}き^キ。小^コ大^{ダイ}不^フ怡^イ悦^{エツ}志^シ
氣色^{キシキ}なり。又^{マタ}来迎^{ライウ}圖^ツへ對^{タイ}し。水^{ミヅ}之^ノ病^{ビョウ}床^{トウ}眞^{マコト}様^{サマ}乃^ノ所^{トコロ}。至^{ヨロコビ}を至^{ヨロコビ}。
護持^{ゴジ}なり。下^{シタ}さ^サる^ル。恩^{オン}礼^{レイ}と述^ノべ。看侍者^{カンシヤ}へも。斯^カる病者^{ビョウヤ}我^ガ
勞^{ロウ}より路^ヂひ。往^{ユウ}生^{ゼウ}乃^ノ素^ソ懐^ケを遂^{ツギ}志^シ免^メら^ラる^ル。嬉^{ウレ}しく疑^{アヒカ}る^ル。
由^ユ礼^{レイ}謝^{シャ}を述^ノべ。○同^{ドウ}十^{ジュウ}日^{ニチ}朝^{アサ}空^{クウ}中^{チュウ}小^コ笛^{フエ}乃^ノ音^ネと聞^キ人^{ヒト}あり。
其^{ソノ}時^{トキ}法^{ホウ}危^イハ七^{シチ}八^{ハチ}返^{ヘン}虚^コ空^{クウ}を瞻^{セン}仰^{ウヤウ}し。敬^{ウヤマ}ふ事^{コト}あるが如^{ごと}く。言^{コト}
考^{サウ}念^{エン}佛^{ブツ}三^{さん}返^{ヘン}乃^ノ後^{ノチ}唇^{シヅメ}をり^ウ動^ウく事^{コト}。八^{ハチ}九^ク返^{ヘン}より。覺^{サト}尔^{ニツク}と
し^シく禪^{ゼン}定^{テイ}入^イるが如^{ごと}く息^{イキ}止^トりぬ。死^シ相^{サウ}鮮^{セン}白^{ハク}ふし^シ。甚^シう
る。し^シりり^リり^リとぞ。清^{セイ}峯^{ホウ}涼^{リョウ}風^{フウ}智^チ月^{ゲツ}法^{ホフ}危^イとり^リり。冥^{メイ}ふ

明治十五年六月十日午前八時。世壽^{セジュ}二十八歲^{ニッパツ}なり。

法^{ホフ}尼^ニ辞^ジ世^セ乃^ノ歌^カ

妄^{マウ}念^{エン}の中^{チュウ}より申^{マウ}せ念佛^{ニッポフ}と拾^{シツ}ぬち^チう^ウひと^{ヒト}と少^{シウ}ぞ嬉^{ウレ}しき

誠^{マコト}香^{カウ}禪^{ゼン}定^{テイ}門^{モン}

誠^{マコト}香^{カウ}禪^{ゼン}定^{テイ}門^{モン}俗^{ソク}名^ナハ兵^{ヘイ}庫^コ新^{シン}太^{タイ}郎^{ロウ}京^{キョウ}都^ト油^ユ小^コ路^ロ下^ゲ長^{チヤウ}者^{ジャ}町^{テイ}下^ゲ
ル^ル更^{マシ}乃^ノ高^{カウ}人^{ジン}なり。稟^{リン}性^{セイ}正^{テイ}直^{チキ}温^{オン}柔^{ユウ}し^シ。人^{ヒト}と物^{モノ}を争^{マカ}ふ事^{コト}
あ^アく寡^カ言^{ゴン}あ^アく他^タ乃^ノ可^カ吾^ゴを言^{コト}ふ^フ。次^ジ慈^ジ仁^ニあり^リ。常^{ジョウ}に放^{ホウ}
生^{シヤウ}浅^{セン}好^{コウ}多^タ里^リ。切^{キツ}より帰^キ三^{さん}寶^{ホウ}乃^ノ志^シ厚^{コウ}し。犹^{ユウ}きども^{ドモ}雜^{ザツ}修^{シュ}乃^ノを
あ^アく西^{サイ}方^{ホウ}往^{ユウ}生^{ゼウ}死^シ道^{ドウ}より^リ。疎^ソを^ヲし^シ。三^{さん}十^{じゅう}四^し又^{マタ}歲^{サイ}乃^ノ頃^{ケイ}五^ご

重相兼ちゆうさうけん。後のち口称念佛くちゆうねんぶつの一行いっぎやうを弥勒みだく乃本願ほんがん兩大師りくだうし乃
 奉送ほうそうなる車くるまを會得えとく。立地たちぢ。一向專修いっぎやうせんじゆ乃念佛者ねんぶつしやとな
 れり。平復ひらふく。家業けがふ乃何程なにほど念忙ねんまじ乃中なかにも朝夕あさゆふ勤ごん以ぎやう怠おそく
 ば。すく專修念佛せんじゆねんぶつ勸誡くわんかいある地ち。誓ちかひく兼詣けんぎ聽り少すくきり。○明
 治十又年めいじじゅうまたし。四月しがつより肺疾はいしやく。罹う。日ひと追お。治ち。遂つひ。七
 月しちがつより病床びやうばう。臥ふ。北野きたの轉輪寺てんりんじ。一定いっぢやう和尚じやう。蓮れん古こ溝みぞ乃車くるま
 ぢれを。問疾もんしやく。顔色げんしやくと見み。小せう全快ぜんかい。覺おぼ。来き。なく見み。く
 れむ。能よく。勸誡くわんかい。称名せうなむ。怠おそ。車くるま。切き。や。愈よ。切き。示し。ん
 づり。病者びやうしや。吏し。より必死ひつしと決心けっしん。病苦びやうくを侵お。称佛せうぶつ。せり
 車くるま。間斷かんだん。なり。○同八月十七日どうはつしちじつ。病者びやうしや。乃日命終ひにちめいしゆう。今日こんにちと思おも

ちりれむ。一定上人いっぢやうじやうじんと請待せうたい。極樂ごくらく乃景况けいけいを妙まうた。と。
 即すなはち。使し。を馳ち。此この。昔むかし。をいひ。き。る。小せう。上人じやうじん。即すなはち。来き。修しゆ。あり。先まづ
 十念じゅうねんと授お。共とも。を。り。小せう。病者びやうしや。端坐たんざ。し。小せう。あきを受う。儲子ぞこ
 息いき。命いのち。を。佛ぶつ。前まへ。香燈かうとうを擎た。ぎ。炎えん。暑しよ。時とき。あ
 る。ゆへ。心こころ。を。禮服らいふく。を。び。懸燈けんとう。り。る。小せう。病者びやうしや。あきを
 足あし。其その。佛ぶつ。前まへ。不お。礼れい。なる。旨しよ。を。り。ひ。て。大おほ。子こ。息いき。を。責せ。誠まこと
 り。至いた。極樂ごくらく乃景况けいけい殊勝しよせうの漢ま。説せつ。を。一ひと。人ひと。り。く。妙まう。む。り
 ハ。家内けだぬ乃若者わがしや。及び隣人りんじん。迄いた。あ。も。聞き。を。し。と。即すなはち。使し。を。也ま
 一ひと。衆人しゆじん。集あ。ひ。来き。り。れ。む。線香せんかう。一ひと。炷た。柱ちゆう。乃の。冒あ。端坐たんざ。し。衆しゆ。と
 共とも。不お。念佛ねんぶつ。彼上人かのじやうじん。浄土じやうど。十樂じしやく乃趣おもむ。と説話せつわ。を。き。り。る。と

まれ臨あり。又少一睡り。ふと目覚め見れば生身が
陀如来光顔魏ことし。あうらさまふ目前りたる世
有り。誠り教喜りせん方なく。おもてまじく念佛きり
に。又五六日歴く。夫六の如来を拝きり。斯く親り好相
感見せしり依る。信ふりよく増進し。まじり去ぐた
糾とかりれた。念佛まじり何の障もなき。本堂を我が栖
乃如くし。常本尊に少一侍み。稱名課業八業通相
續せしり。幸臨終の砌に更ふ間断あり。夢現なき。
阿彌陀佛を拝きり度なき。近頃又寮内
佛半間のまじり。阿彌陀如来光明赫奕として。顯き給ふ

を拜し。難きを号と。牙は折りぬる。夜乃明ると待
候し。小同宿の秀戒法尼りぞ務らまはる。○明治十
八年。初冬に頃より。病再發しり。苦痛ありれむ。口
称更り倦多かり。十一月二十日。法尼乃り。あせり
あうん。今ハ七日ぞりみたりぬ。誠み嬉しきあに限
り。そよりハ我側み。助音念佛まじり。そふそ
ち永訣と述く。欣慕至切かり。同二十六日。言ふ遠そ
び。目出玄往生せり。実不明治十八年。舊冬十一月
二十六日。是陰曆十一月。日没なり。世壽
八十四。清譽池香戒涼法尼と名く。

右好相感見乃事ハ。没後遺書と得て記す。数多述懐乃
詠を載られたる中ニ

法ひよこふ香辺乃山乃夕烟りきやあ身死入りたつむ
毒始と来津とりー 飛色白雪と清く花きく比ぞほくも

妙揚大姉

自譽浄心妙揚大姉ハ相州陶伎郡大磯驛釜尾長吉の養
母なり。俗名王紀といひ。齡又十一歳乃頃より他力
本願の旨を信し称名相續たり。○明治十年九月平塚駅
阿弥陀寺に於て鎌倉光明寺吉水教正を請ひて相傳會

修行ありけり。聖女も此會に列りて五重相傳し。一層
信心と益し。日課三千遍を誓約し累日怠らば聖十一
年四月信州善光寺へ参詣せしが。如来の加護より益と
信心と厚く。○同十三年春の比再び吉水教正に誓交
し。日課三千遍を増修せり。此聖女壯年ありて夫も後
き一人乃娘も種々艱難の中二年を送りしが。念佛門に
歸入せり。始より現生護念乃加被りて依らん。近年日と
追て世業も繁榮し。娘も女子のもせり。聲は長吉も孝
心いと厚く。俱に信心念佛を。是や同類に依るる良縁
とりしなり。○十四年十二月廿五日昼。聖女稱名し

がく生睡りりる。いぢ女と号く唯今熱海乃佛工より。
間浮檀金乃地藏尊三躰を彫刻して贈来り早く拜免
よ。此佛工へ何程礼謝あるりの款金五円と巻込る。
為耐ありやとりよ。いぢ女の不審あがぐ。まふあぐ宜
しかる。地蔵尊の何きと在せやとりく。まは女惘
然と。今迄あり在を。まふの拜きざるや。相々
夢あぐりる。頻々歎息。本尊あぐび。地藏尊へ
香燈を捧げ念佛せり。○十五年四月八日より。病癒り
臥りりる。日課称名の平素り矣あるすけく曾修せり。
此の三月此頃一教娘の女乃養ふ。吉原の山を自宅へ

清く母り十念授與せられりと。覺く後此奉を母
に授けり。待つといふ。まふ此結縁を歎び居りり。
思ひきや母の病癒り。四月十九日吉原の山
々小田原駅近傍化導乃帰海。まは女乃病を初め十念
を授與。臨終用心の勸諭あり。病者いも。いぢ女
いぢ女も。結縁を思ひ出。歎喜一方あり。娘
殊々。等々信交り。まふ平塚駅ある。笹尾章保篤信
ハ今朝より来て臨末乃称名を助音せり。○翌二十日曉
正命終近ばきり。断末乃微苦あり。吉原の山昨夜
ハ平塚駅より止宿あり。臨終の音告を。速

疾了乘車ありて病者乃枕邊に到りて十念授與あり
り。病者は是を交稱しあぐ。近接佛所を此糸と取。十
念畢當頭息止りより。嗟呼哉正の遠隔乃任在
るを。日課誓文の始より。臨期乃今に至り。思ふに
りて十念授与あり。正命終と嗟呼同時あり。師資乃
実宿縁涉りぬある。死相笑を會く生るが如し。
實は明治十三年四月二十日。齡六十二歳あり。○没後
其女乃朝暮亡母を事する生るはの如く。孝者
て称名相續あり。同年十二月十九日夜乃養。香花院
る因所大運寺へ参詣しり。同寺乃西方より。老母に

とるるを。容貌少く来ると名る。是は後世に面あり
るが如し。是は女子追孝乃至実亡母の感徹を
者。柳や上品往生の冥證を示し。死に兩端何れも
あらん。

芳光居士

福寿院島琴芳光居士。相州三浦郡横須賀町高田嘉兵
衛と呼ぶ人あり。其性勇健。日して質直剛毅あり。陰に佛
神を崇敬し。陽に世務を専らとして。夜を以て日や
ぎ短し。と云ふ。其業乃勵。中にも信を尤もり。記。

○明治八年十月。公郷村聖徳寺に於て。本山光明寺吉水
教正を招請あり。因て授戒并に日課を誓受し。其後
特不法号と号す。潜る不称名也。時、袂中、小數珠を轉
じりて密唱する。人敢て知る者なし。横須賀造船所受員
清用を勸免り。故恒に數十人と役使す。自ら言く我々
昼夜數十名乃人夫を驅役し。獄卒も等し。たを家業と
り。後世に必火途に至るべし。世乃信者、極樂を願ふ。我
の地獄を求むる不似たり。於戲是産業あるを止むを得
ず。○十一年一月。此頃より。豫免死期を知する。や。我
は今年八月命終まらざりと。時、終りに歩まざる。音聲常

不異する。予かりれど。信ざる人なり。○同四月。倭然と只
出づる如く。引り浄室の新築を企て。良材を集免。造管を
急ぎ。於終の用意ありと。り。○五月中旬。小生國房州
朝夷郡西白須賀村栗山家。日蓮小玉り。考妣乃墳墓を拜
し。尚一族へ永訣を演る。帰宅あり。○七月初旬。漸く病褥
小着し。稱名相續り。り。間断あり。而して切りに浄室
の落成を急ぎ。斯浄室の中間一坪。乃床板。釘釘を禁止
せり。人其所由を問へば。余今度。没時湯漱する。用心也と
り。○八月一日。新造乃浄室落成し。れ。是。小縁徒
と喜悅念佛あり。病病日を過る。重り。往り。れ。む。十七日十

八日下ハ近隣乃信者數十人を召集し、鉦を敲く念佛を勤免。さうさう指揮し、赤飯等を施りたり。○十九日朝卒然と思出く、浅黄布派の小袖を、明後廿一日朝迄急だ、潤ぐまき方を自身職工へ申付る。廿一日朝約乃如く小袖を潤来くるを乞く甚欲び、同日午後五時着獲人、柱られく、壽上は端坐し、山身西面合掌し、稱名をなす。聰るが如く息絶りり。實ハ明治十一年八月二十一日。行年六十五歳なり。

評曰嗟呼芳光居士營業忘忙の中陰うふ後世資糧を貯積する。言齡乃期際然るべかりとんひ、存あり。特

し袖中数珠を轉じ、盡結するなり。至誠心の行相かの元祖大師の古阿弥陀佛し、亦し臨する趣あり。往生疑なきとの、辰昏少時乃勤行をも、人目り、一々る吾曹と孰其慙取きする、存ありむや。

里よ女

尾州知多郡藪村銀右衛門母、里よ、其性愚直、一々他、逆らひ争ふるなく。一期乃間怒乃を、と乞く、あとなし。少年は頃より誰を、と乞く、と乞く、孫の名号と乞く、一々。中年自ら日課千遍と乞く、中止を、乞く、老後、一々

以く勇猛し行住坐臥念佛をりて口実とせしむ。皆
人異名しと。念佛深くとそりひりる。それと種ふれ好相
を擇むる事常すりとのや。猶る燈火なりとも。家乃
内光明かゝるべき。殊りあるるしなり。いひ常し佛乃
事終を悟りり。家内乃人の何きも後世にありり。れ
を。老耄しくそりるるなり。むなど云く。心をや先そ
ゆ。こもなり。しぞ念なり。○明治五年四月五日頃より。
い。不快なり。し。平臥する程の事あり。あり。
也。只一向り念佛する外。他事なり。り。家乃後ある
隱宅に娘と。し。四月十日夜。救帳乃り。あり。

娘のり。し。休む。念佛を中させ
と。念佛して。何り。り。日。行
ま。起出ざり。れ。家乃嫁。い。思ひく行
ん。娘を寝る。と。起出。夜をさづ
見れ。は。合掌して。往生。きり
と。明治五年四月十日。享年七十七歳。了。法名
ハ。ウ。り。

紫雲大姉

紫雲大姉。俗名あり。尾張國知多郡名和村。坂勘右衛門の母

也。中年に頃まぐり。無常此あとりり。と知くぞ。朝暮現生
 此奉ふのち執着し。業をあられぞ。三塗乃重苦を思
 まへく。年月と送まぐり多し。明治二年七月十二日。
 娘乃あや女。重に病をまへ。終りけり。あや女。あ親
 共。哀傷乃情う堪へず。眼前乃無常。今更乃やうに覺
 して。立地。道念と發し。亡女乃追告乃為ふ。因國崎
 海山中。亮光上人と請し。別時念佛と勸免。親友を聽守を
 して。上人往生淨土の安心起り乃者。怒り。教訓をき
 り多し。宿善開發乃時。あり。あや女。あ深く。孫
 陀乃本教を信し。祖訓を仰ぎ。速し一向專修乃行者と

なり。兩人おちトく日課念佛二業通と誓受し。相續せ
 り。さう年々。厭欣乃志増進し。万変と捨抛し。日別五時
 の勤行課佛懈怠なく。時々亮光上人と屈請し。別時念
 佛と修し。其毎度親友と聽受し。淨信を策進し。一向專
 念乃外他変なし。又三州求道上人と請し。別時念佛を修
 行し。説教と懇求し。まへ。信公堅固なり。○明治十年
 三月十五日より。支壽回を。自己乃逆修乃為し。別時
 念佛と始り。初七日より。二千百回忌まぐり。年回毎。一
 七日の念佛と定免。其日數四百廿三日なり。あ死後
 乃追答す。い。あま。あ増り。あ増り。あ徳なり。あ人。あ。○明

治十四年七月下旬ある女。少病敷りり多ふよりを逆修
 へや免よりけきど。病中なる又時乃勤行怠りなり。〇同
 十五年又月六日乃次より。醫業効驗なく重病となりぬ。
 痛苦乃堪難き中より念珠をとりて日課かく事なく。
 臥たり。又時乃勤行を怠り勤免られり。実上根上
 行乃人なり。〇同十六年二月下旬より。醫業を用ひず
 只勵聲経名しく佛乃来迎とまりごかりのありさほや
 之後ハ痛苦きくにきく。裸佛三万より四万稱日々急
 なく。厭飲乃公至切なり。〇同三月廿六日より。西壁ふ當
 麻曼荼羅聖衆来迎乃圖とかまなり。日々引接をきり。

四月三日。亮光上人来臨ありて。十念を授りし。此より
 必定往生と思ひて念佛勇進し。法を免て急事をきくと。
 昔口ハ勤法きくまに水決ありり多ふ。病者大に歎息して。
 信心増進し。まゝ稱名をり。又病者よりく看病の人々
 親族等より念佛を勤むる可いと。意ある。諸命終乃日ハ早
 朝より念珠をきく。頭北面西ふ臥し。只合掌しく念佛
 其命終乃時より。誓賀法子。枕邊ふ来り。助音念佛をき
 るより。即ち眠るふひと。安祥とし息絶りり。時
 年五十四歳。実ハ明治十六年旧曆四月九日申刻あり。新曆
 十五日なり。是より依り上乃文をきき。大姉發心乃日より。

乃念佛了過ぐる志ありやハ侍る處き大徳乃期あり
 らかり瑞兆きたれも何ぞ往生を疑まん。嗟世間又現了
 子を先ごく孫了とくれ。ま當時哀惜しく返情やる才
 きたも。日せ經る中疎く眼前乃無常ハ我身了たれぬ
 く思ひ過る大りうりぞや。慈快僧山乃哥よ
 夢をびり降参の哀と思ふこそなき人よりもけりふりりれ
 生死事大無常迅速用ふ志多し。

祐心大徳

西蓮社向譽専称祐心大徳。尾州知多郡高岡村傳左衛

門將嘉助と称き者なり。中年に頃三州荒井山徳位上
 人乃説法を聴歩し。厭飲公泉乃僧くがおとく。考あや
 あり。教をい。禮をく徳位上人を師とす。剃染乃身と
 なり。茶事さき一。一向専ら念佛。持戒堅固なり
 り。日々晝宵刻より起出て夜の亥刻より五時
 乃勤行怠く。法称名相續す。○明治七年十月初旬腫物を
 患ひ。漸く重病となり。り。生近がききり。と。歎
 念佛をり。が。病を得く歎ぶとり。其。其乃念佛者な
 り。九品院所位上人境内無常院より。其。其乃念佛者な
 念佛をり。命終四十日許に命。自分所持の念を。大衆

あふび有縁乃人こみ配分して両方臨終行儀入る枕
邊りの来迎佛を懸うせ。香燈を供養し。時々臨終乃思ふ
住し看病乃人手引整と打せ念佛あり。相問疾乃人來り
く。此交ひ必死なり。決定往生をぐし。称名を念ふ。忽りそと
り人あれも。まきけと歎き。看病する志隨和尚りた
びく十念を乞ひ。於助音念佛と頼む。其も称名する
りち。病者よりく西に向ひ。称名をうる。可度とかりし。
○十一月十一日夜看病の人りかくりて。今夜のあふ
びく。佛は来迎よあがりて。生生をせむるなり。多
年乃大願成就時至れりとりひい。が。重夜子刻り至りて。

言々念佛志あり。命終をうまきり。時り六十六歳実ふ
明治七年十一月廿一日なりき。

智天信女

信女智天の。三州賀茂郡三好村野々山榮左衛門乃娘也。
俗名をまといりし。幼時より佛道を信し。何となく
後世心ありりりり。好きて草花を栽く妙を。目より
本尊り供養する可きなり。明治十二年正月下旬より。
發病しりり。漸く重症となりり。今必死と覺
悟し隣家なる源花とりり。後在者残む。時々まねき

く。西方往生の要道を尋りて。其の末に尾州崎海山中
泉谷亮光上人より聴聞せし。其の相承乃安ん乃旨と評
す。一向専修念佛と勸免り多し。其の女も女とて深
く弥陀乃本願を信じ。一向専修乃念佛者となりぬ。さ
る四月に入るといふ。いふく必死と決定し。医業をや
る。只躬尊称名し。佛に近接を待たず。同日十月
七日看病乃人より試み。湯と濃し。物身とぬき。海
衣を着し。臨終乃行儀と整へ。枕頭より弥陀尊末迎乃序
を掛く。香花燈明を供せし。心静し。一向称名なり。同二
十日夜。夢より。弥陀尊化佛菩薩光明赫奕とて。来現

し。臨入りと。乃去者病者不語く。いと難多し。と。願者念佛
きり。まじり信を勇進し。いと。称名絶望なり。同廿三
日未刻命終と見く。其れを。往金といふ。法子。あぐくと引
聲亦唱し。助音念佛を。きり多し。息絶ぬるや。うなり
。一時許る。獲息し。目を寐れ。嗟唯今いと。尊を愛し
行き多し。星乃如く。化佛を。きり。次を見たり。つる。
誠り難多きこと。限なり。といひ。歎喜流涙し。願者念
佛也。同日夕。母より。今。浄土に往生するなりと
いひ。歎喜多し。さる。丑刻に。合掌し。て
来迎佛を拜し。其の。おと。頭北面西し。臥し。

合掌して言ふ言ふ佛一あぐら。息風はきたりけり。死相
るりくあぐら生るが如く。合掌は手札をばせんあり
る。見守り人との盛衰をばするの事ありとぞ。其の明治十
二年。陰曆四月二十三日。享年十九歳。觀空智天信女と法
名一たりけり。

智天信女。蓮花と名づく。母の妙香と名づく。
供養一終名して終てては。往生を遂ぐきま

るよりとす。

亮光上人

あやとすと。蓮花と名づく。母の妙香と名づく。今其菩提のみを結ぶなり
右の明園法師と云へる人乃其記して終られたり

固より。此一傳を此へて陰曆乃月日ありて記載を
れり。總じて明治改曆已後かゝる所の陽曆公道乃
月日を用ふべきを邊境函陸乃村野の。回曆と固守
あり。是乃其の執するあり。月別乃黑白盈虧朝夕乃溢
沈等の。回曆ふありて。親しくかゝる難りれむ。大
用ふるをなれ。此の乃月日ふ回曆を用ひむとす
。陰陽あぐらべくあぐら。年末年初乃際りなりぬれ
む。紀年乃遠へむなり。凡そ初篇より。此篇より。記載を
りまゝとす。其の載るゆゑなり。月日陰陽と遠り
るもあぐらなれむとす。其の終りけり。

結勸

玄義分云。生死甚難。厭佛法。復難。依其發金剛志。橫超。四流。と。まゝの鞋を厭ひ。依び鞋を依ぶ。金剛乃志を發するなり。總じて佛教何きあも。此心と以て去行の地盤と決きども。就中淨土往生。一門の少くも助かへ。乃口稱乃一法。三念。三念。乃修。乃行。乃三歳の小兒も行せらる。たれども。八十乃老翁も。此心と得。證。淺深。有ども。此心を具とぎれ。を行業。志。一。たれども。造るとなる。實誠乃厭。依。心。りて。念佛。往生。する人。り。四。答。其。位。を。分。て。一。り。の。上。と。機。系。が。報。命。は。受。る。と。待。き。候。一。と。才。と。厭。

ひ命と捨る人。苦導。大師。佛。在世。高樹。深谷。小身。を。投。げ。る。その。百。余。人。と。ある。數。津。戸。三。郎。号。於。法。師。勅。修。御。傳。盜。賊。源。兵。衛。靈。巖。傳。乃。如。た。お。ま。ま。り。末。世。乃。我。り。り。の。形。乃。強。威。乃。心。教。一。鞋。り。れ。れ。用。捨。ま。べ。一。と。先。哲。が。誠。一。め。ら。ま。り。二。り。の。上。機。系。依。乃。心。源。り。れ。ども。は。り。せ。て。生。存。ま。る。と。憂。へ。だ。ま。る。報。命。は。受。る。を。待。く。お。候。一。陰。陰。乃。夕。を。期。と。一。て。念佛。する。人。元。祖。大。師。乃。生。ら。の。念。仏。乃。切。を。は。り。死。を。ば。淨。土。に。生。れ。か。ん。免。る。も。角。も。此。身。り。の。思。ひ。候。ふ。る。ぞ。き。き。と。言。の。人。る。是。た。空。の。ま。ま。ら。ら。分。り。あ。て。り。の。程。も。勵。ま。て。此。域。り。入。る。む。と。思。ふ。べ。う。ん。る。

三つの中機随分り厭欣乃心在あがら。自他乃死と見
すく。忽然と怖畏乃心と生波。あれども。於生者必
滅乃道理を明く。思ひて。厭欣念佛する人。言今念佛
者。此時ありあがり。眼前乃無常と見。亦斯有ん
と。一旦怖畏まれども。怖れざる。道多づきなり。後と。
可成縁を思ひあき。思ひお續するなり。されども。心とを
免え。うはく思得ば。此時を放る。四りの下機。人生
限あり。久住をべう。後世淨土乃資糧の携ふ。願たす
と。理を推し。厭欣乃心と殺せども。於あふ。函をか。ぬ
く。決定心なり。されども。死を修り。適多。ざる。思

ひ念佛する人。是の臨終。佛力加持して。身愛執情を忘
ま。願心を生じる人なり。とい。是の甚危く。於あ
る。ざる。機なり。佛力加持なく。いのんをむ。頓悩する
を。た。凡支なれ。果しく。懈怠乃。才に誘われ。あ。か。乃
果。た。貪瞋。火。河。又。四。又。寸。終。ある。白道。なり。火
乃。為。了。竟。了。お。後。乃。歩。を。奪。する。願。し。ら。づ。う。思。ひ。く
知。る。處。あ。こ。そ。終。終。用。心。乃。する。初。二。篇。乃。結。示。云。へ
る。如。し。習。不。在。前。懷。念。何。辨。乎。され。た。此。四。等。中。に。上。中
に。二。機。を。的。と。志。く。お。後。き。よ。と。り。一。丈。乃。堀。を。越。ん
ふ。一。丈。又。尺。乃。堀。を。越。んと。思。ふ。願。し。心。を。上。品。ふ。か。る

くやうく下流乃往生と得る程に至るむ。性愚懶惰乃凡
 夫あれむなり。然るを大かこの人心を身と卑下を志
 く。行業より謙退し動もせられむ。懈怠を怖ましく。目深乃少数
 を誓ふ。是始より怠慢を用意するなり。佛ある真実心と。
 領受を結んや。賢を足く希し。かむをおもふ。かあえ
 め迄に。上品乃多数を樂求して。ゆゑく自墮落をりふ。放
 弛ひそ。是を厭欣乃心乃淺深に依るをきなり。
アサイトカ

南無阿彌陀佛

大僧正慈圓

うき世といふまゝなりなりれ

明治十七年九月三十日出版御届
 同治十七年十月
 著述人 神奈川縣平民 垂水良運
 東京府 吉水大智
 東京府 深川區龜住町四十七番地

明 治 往 生 傳 四 篇 助 梓 名 署 金 三 拾 壹 圓 五 拾 錢 尾 張 鳴 海
 山 中 沙 門 亮 上 光 人 金 壹 圓 東 京 圓 某 老 上 人 金 壹 圓 相 州 足 柄 下
 郡 真 鶴 某 上 人 金 壹 圓 東 京 圓 某 老 上 人 金 壹 圓 相 州 足 柄 下
 遠 州 敷 老 郡 人 金 壹 圓 東 京 圓 某 老 上 人 金 壹 圓 相 州 足 柄 下
 勢 州 海 老 郡 人 金 壹 圓 東 京 圓 某 老 上 人 金 壹 圓 相 州 足 柄 下
 仰 州 喜 捨 塚 郡 人 金 壹 圓 東 京 圓 某 老 上 人 金 壹 圓 相 州 足 柄 下
 伊 願 望 聽 男 女 信 疑 謗 譽 同 發 道 心 均 泳 願 海 吉 水 大 智 誌

發兌

東京 南傳馬町一丁目 大村社屋
 同 三間堀町一丁目 明教社屋
 同 南鍋町一丁目 鴻盟社屋
 同 下谷南稻荷町一丁目 和泉社屋
 同 芝飯倉町五丁目 山口屋

價金銭

